ＩＳ～インフィニット・ストラトス～黒の神と白き騎士

リクヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～黒の神と白き騎士

【Ｎコード】
Ｎ１７８５Ｓ

【作者名】
リクヤ

【あらすじ】
ハイスピード学園バトルラブコメＩＳインフィニットストラトスの原作を追いつつオリジナルストーリーを組み込むオリジナルキャラ＆オリジナルＩＳを登場させるＳＳです。

特別ＥＰ設定１（前書き）

オリジナル要素が多めになると思いますので嫌いなかたはバックお願いします。
大丈夫なかたは読んでみてください。
嫌いな方もまだ設定だけなので設定だけでもよんでからきめてくださると嬉しいです。
初投稿なのでよろしくお願いします。

特別ＥＰ設定１

今回は大まかな設定だけ書きます。
オリジナル主人公
名前
進藤大和

身長
一夏よりすこし高いくらい

ルックス
一夏と同じかそれ以上のモテスリム

設定
自由国籍権と国家代表以上のレベルのＩＳ操縦能力を持つ。
現在は日本の国家代表になっている。
政府にも発言権がある。
どこでもＩＳ（学園内でも学園外でも）を使える。
束さんとＩＳを開発した人物でＩＳが開発された１０年前からＩＳを使えるが秘密にしていた。
コアなども作れるのでいつでもＩＳの数を増やせるし最強のＩＳも作れる。
日本人であることに誇りを持っている。
専用ＩＳ（第２世代型から第４世代型までの訓練機と専用機）は何機か持っている。
オリジナルＩＳも出す予定です。
格闘技＆スポーツ万能で頭も束さんと同じかそれ以上の超天才児。
実家は超大金もち。
小学校を卒業してから束さんと合流して各国を周った。

家族は事故や病気で大和が若いうちに亡くなっている。
これからも書いていくうちに設定は付け足していきたいと思います。
ヒロインは一夏とオリジナル主人公大和で3人ずつにわけてハーレム作るつもりです。
具体的には一夏に箒、鈴、ラウラで、大和にセシリア、シャル、楯無さんにします。
オリジナルキャラもだしたいです。

小話
名前は作者の友達2人から少しずつから取った名前です。
ネーミングセンスがないのは許してください。
チートになったりキャラ崩壊を起こす可能性もあります。

特別ＥＰ設定１（後書き）

どうでしょうか？
設定だけでもチートですね（笑）
次から本編に入ります。
コメント＆感想＆誤字脱字の指摘お願いします。
アンチは無しでお願いします。

ＥＰ１旅立ちそして・・・（前書き）

ついに本編を始めました。
読んでいただける人が設定が許せる人だけだと思うので気楽にいけます。
それではお読みください。

EP1旅立ちそして・・・

今日はＩＳ学園入学式の１日前だ。
「それじゃあいってきます束(たばね)さん」
「大和がいなくなるなんて束さんは悲しいな～」
そんな風に別れを惜しんでいると時間は飛行機の発射まで１０分をきっていた。
ちなみに空港までは走って２０分ほどかかる。
完全に遅れたようである。
「じゃあ一夏のための専用機【白式(びゃくしき)】の最終調整お願いしますね」
そう言うと俺はフランスの第二世代型ＩＳラファールリヴァイヴを起動させて空港まで飛んだ。

「う～ん日本は久しぶりだな～そういえば一夏はどうしてるかな？」
そんなことを考えながら俺は実家へと足をむけた。
実家につくとすぐにＩＳ学園に入学する生徒、在学中の生徒のデータを確認する。
そうしているうちに電話がかかってきた。
「やっほ～みんなのアイドル束さんだよ～」
「どうしたんですか束さん？」
「白式(びゃくしき)の調整だけど少し遅れそうだからいっくんによろしくね～」
「一夏には内緒だって言ってるでしょう。そういえば一夏のデータ先行して入れてあったっけ束さん？」
「まだだよ～」
「じゃあデータは俺が入れるんで白式早く送ってくださいよ」
「う～んわかったぁ」
「だるそうにしないでください、じゃあきりますよ」

そして俺は電話を切った。
「明日から学校だし早く寝るか～」
その後準備をして風呂に入ったり食事をした後執事の1人を呼び学園に荷物をおくってあるかを確認して眠りに付いた。
その眠りはとても穏やかだった。

ＥＰ１旅立ちそして・・・（後書き）

どうだったでしょうか？
できるだけ早く更新するつもりですが学生なので更新は不定期です。
短い文でできるだけ多く投稿していくつもりです。
できれば１日１回更新できればいいと思っています。

ＥＰ２再開（前書き）

２話目です。
コメントや感想がまだまだ少ないですがいただけてうれしいです。
これからもよろしくお願いします。
それでは２話目をどうぞ。

EP2再開

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR(ショートホームルーム)はじめますよー」
黒板のまえで微笑む女性は副担任の山田真耶(やまだまや)先生だ。
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「じゃあ自己紹介をお願いします。」
そのまま順番に自己紹介が終わり俺の番になった。それにしても俺の親友織斑一夏(おりむらいちか)の名前だけで終了っていう自己紹介はどうだろうか？
それに幼馴染の篠ノ之箒(しのののほうき)までクラスが同じとはついてるね俺。
「進藤大和(しんどうやまと)です。今までは皆さんも知っている篠ノ之束(しののたばね)博士と旅をしていました。そこにいる一夏とは昔からの親友です一夏も俺もなれないことがあると思いますが1年間よろしく。」
そうして自己紹介が終わってすぐに今まで現れなかった担任の先生が登場した。
その人は俺の親友織斑一夏の姉、織斑千冬(おりむらちふゆ)だった。
それにしてもこのクラスには代表候補生もいるみたいだしラッキーだな。
もちろんラッキーなのは一夏がいたことが大きい。
「それではSHR(ショートホームルーム)を終わります」

「一夏と箒ちょっと来い」
「なんだよ大和？」
「な、なんだ？」
俺はそのまま2人の手を取り屋上まで行った。
「箒とは6年、一夏とは小学校以来か？2人ともすぐわかったぞ」
「ほんとに久しぶりだな。」

「よくもわかったものだな」
「2人とも変わらないからな」
「で、一夏はなんでＩＳうごかせるんだ？」
「それがおれにもわからないんだよ。」
「一夏は声明があったから知っていたが大和はなぜ学園（ここ）にいるんだ？」
「俺は１０年前からＩＳは使えたぞ皆には教えてなかったけどな、ちなみにＩＳの開発も手伝ってたぞ。」
俺たちが談笑しているとチャイムの音が聞こえた。
キーンコーンカーンコーン。
「つかまれ一夏、箒」
俺はそのままリバァイブを起動させて親友と幼馴染を乗せて教室へ急いだ。

ＥＰ２再開（後書き）

今回は内容が薄くなってしまいました。
次にはセシリアの初登場です。
早くいちゃつかせたいんですけどなかなか話が進みません（焦）
がんばって書いていきたいと思います。

ＥＰ３互いのプライドをかけて（前書き）

今回は文才がないため長くなってしまいました。

それにヒロインとの絡みにまだ入れてない（焦）

長いですがご一読お願いします。

EP3互いのプライドをかけて

一時間目はＩＳの基本的な運用についての授業だったのだが俺は東さんとＩＳを開発したから授業でやることは復習にすらならなかった。
視線を左に向けると一夏が机に突っ伏していた。
その様子に気づいた山田先生が一夏に声をかけた。
「織斑くん、何かわからないところがありますか？」
「ほとんど全部わかりません」
あいつマジかと皆が思ったことだろう。俺だってそうだ。
「織斑君以外にわからないところがある人いますか？」
やっぱり誰も手を挙げない。
「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」
千冬さんが呆れと怒りの混じった声で聞いた。
「古い電話帳と間違えて捨てました」
「山田先生この馬鹿には俺が１週間で覚えさせるので授業を再開してください。」
それにしても馬鹿すぎて笑いが止まらない。
「おい、大和あれを１週間は無理だって」
一夏が左から小声で話かけてくる。
「俺なんか１発で覚えたぞ、それに千冬さんに恥かかせる気か？」
「わかったよ、ちゃんと教えてくれよ」
実を言うと高校受験の時もメールや電話で勉強を教えてもらっていたから大和の教え方が良い事を一夏は知っている。
だがそれにしてもあの量は大変だと思い、ため息が出る一夏だった。

時間は少し過ぎて休み時間。

「少しよろしくて？」
いつも思うんだがよくないって言われたらどうするつもりなんだろうか？
確かあの人はイギリスの代表候補生のはずだ。
「訊いてます？お返事は？」
「あ、ああ。訊いてるけど・・・どういう用件だ？」
一夏やっちまったな。ああいうタイプは大体プライドが高いからな～。
「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」
正直このタイプは俺も一夏も嫌いというより苦手だ。
「悪いな。俺、君が誰か知らないし」
「わたくしを知らない？「この人はイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットさんだぞ一夏ちゃんと覚えとけお前よりは強いんだから」誰ですのあなた？」
「俺は進藤大和だ。この馬鹿（いちか）の親友だ」
「大和いま馬鹿にしただろ」
「わたくしを無視しないでください！！」
「あ、そうだ大和、代表候補生ってなんだ？」
「信じられませんわ極東の島国とは「字のとおり国の代表になるかもしれない候補生のことだよ」わたくしが喋っているでしょう！！」長くなりそうだったから説明したんだが。
「大体男でＩＳを使えるのがまれだからと言ってよくこの学園に入れましたわね期待はずれですわ」
「一夏に何かを期待することが間違いだぜ。」
「あなたもなんですの？入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートに敬意をはらってくださる？」
「すまんがおれと一夏も倒したぞ、まあ一夏のは突っ込んできたのかわしただけだが」

「な、どういうことですの？」
俺にいわれてもなぁ。
キーンコーンカーンコーン

「この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明するのだがその前に再来週行われるクラス対抗戦に向け代表者と副代表者を決める自薦他薦は問わない誰かいないか？」
「一夏を代表に俺は副代表に立候補します」
許せ一夏代表になるのだけはだるいが副代表はほぼ形だけだしサポートはするからな。
「では代表は織斑一夏副代表は進藤大和他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」
「待ってください納得いきませんわ。実力からいけばクラス代表はわたくしです。それを珍しいからという理由だけで極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練にきているのであってサーカスをする気はありませんわ！」
耐えろ俺一夏もイライラしてるが耐えてるんだから。
俺を馬鹿にするのはいいが親友を馬鹿にしやがって。
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしには耐え難い苦痛で」
ああもう我慢できねぇ。俺の祖国と親友（ダチ）を馬鹿にしやがって。
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。」
「そうだ世界一まずい料理で何年覇者だよ？」
奇遇な事に一夏も我慢の限界だったらしい。
「決闘ですわ！」
「ああやってやるよ。一夏もいいだろ？」
「ああ」
「言っておきますけど、わざと負けたりしたら奴隷にしますわよ」

「大丈夫だ一夏も俺も真剣勝負では手を抜かない。それと俺の場合は負けたらでいいぞ」
「そうですかわかりましたわイギリス代表候補生の実力をみせてあげますわ」
「ハンデは2人ともなしで良いぞ一夏には必要かもしれないが俺がハンデをつけても良い」
そう言ったらクラスから爆笑が起きた。
みんなしらないからな～。
「でお前が負けたらどうするんだ？」
「なんでもしてさしあげますわなぜなら負けませんから」
よしなにをするかは今から考えておこう。
「話はまとまったなそれでは勝負は1週間後だ進藤、織斑、オルコットは準備をしておくように」
あとで一夏の特訓どうするか考えようっと。

EP3互いのプライドをかけて（後書き）

今回はいつもと違い長くなりましたがいかがだったでしょうか？

ちなみにセシリアとのバトル回にはまだ入りません。

次回はオリジナルストーリーを組み込みたいと思っています。

ＥＰ４最強との邂逅（前書き）

楯無さんの初登場です。
今回から少しの間原作と話がそれます。

ＥＰ４最強との邂逅

セシリアとバトル事になった放課後

俺は一夏の勉強をひとまず山田先生に任せて箒に訓練の手伝いをを頼みに行った。

「箒、一夏の特訓手伝ってくれないか？頼めるの箒しかいないんだよ」

「何で私が」

「頼むよ箒！俺も一夏もなんでもするからさ」

「一夏と・・・よし引き受けよう」

最初のほうが聞こえなかったけどまぁいいか。

箒が了承してくれた後俺は教室に戻って山田先生と2人でダメ生徒に勉強を教えた。

暗くなり始めた頃に勉強を切り上げた。

「そういえば2人にはまだ部屋を教えてませんでしたよね？」

「そうですね俺と一夏は同じ部屋ですか？」

「そうなります部屋の鍵渡しておきますね」

「俺は1週間は家から通学じゃないんですか？荷物ないですし」

「じゃあ今から行こうぜ一夏。じゃあ山田先生行ってきます」

そう言い残して俺はリヴァイヴに一夏を乗せて一夏の家に飛んだ。

「俺この後学園戻ったら用事あるから鍵渡しとくな」

「わかった、用事って何かあるのか？」

「まぁな一夏の為に訓練機の申請と人に会うんだよ」

ちなみに誰と会うかはまだ俺も知らない。

今日の朝、7時に生徒会室に来てくださいっていう差出人不明の手紙があったんだから仕方ないだろう。

「それと一夏の特訓を箒も手伝ってくれるってさ。訓練機の許可がでるまでは箒と剣道、俺とお勉強だからな。」

「なんで剣道なんだよ？」
「剣道をやるのには理由があるから心配すんな」
そうこうしているうちに一夏の荷物の準備が終わった。
「準備おわったなそれじゃ飛ぶぞ」
リヴァイヴを起動させて一気に学園まで飛んだ。
「今日は先に飯食っててくれよ一夏」
「わかったよ早く用事済ませて勉強おしえてくれよな」
「おう。じゃあ行って来る」
そういって俺は生徒会室へ一夏は食堂へと急いだ。
「６時５０分か１０分前だけどいいかな？」
だれに聞くでもなく考えていると後ろから2年の女子が近づいてきた。
「大和君だよね私が誰だかわかるかな？」
もちろんデータで確認済みだこの人は生徒会長である。
「更識楯無（さらしきたてなし）さんですよね？」
「そうだよ大和君に興味があるから呼んだの」
「先輩、用件はなんですか？」
「大和君と一夏君に指導してあげようと思ってね、まぁ大和君も一夏君も私より弱いからね」
この人にもばれていないようなのでガードの固さを再確認した。今の俺は日本の国家代表だがその事実を知っているのはごく小数だ。秘密にしているのには訳があるんだけどね。
「このことを一夏は知ってるんですか？」
「一夏くんはまだしらないわよ」
「じゃあ明日勝負してください俺が負けたら俺も一夏も指導を受けます」
「いいわよ勝負の内容はどうするの？」
「それは明日決めましょう、それと一夏にはまだ秘密でお願いします」
この人の実力なら明日は少し疲れるかもなぁ～。

「勝負は明日の昼休み2人だけで戦いましょう」
「わかったわ生徒会長の称号が伊達じゃないことを教えてあ・げ・る」
最後に顔を近づけてきて耳に息をかけられた。この人にはペース崩されるな。
明日の勝負が嫌になってきた大和だった。

ＥＰ４最強との邂逅（後書き）

どうでしょうか？
次は楯無しさんとの戦闘です。
まだＩＳはまだ出したくないので生身での戦闘になります。

ＥＰ５最強はどちらの手に（前書き）

楯無さんとのバトル回です。

駄文ですみません。

ＥＰ５最強はどちらの手に

俺は楯無さんとの会話を終えるとすぐに食堂にダッシュした、時間はいろいろあって７時３０分になっていた。食堂は８時までである。
「おばちゃん、カルボナーラ１つね食券ここでいいんだよね？」
なんとか間に合い席を探していると箒と一夏がいた。
「一夏もまだ食べてなかったのか？てか右頬どうしたんだよ？」
「部屋間違えて箒にやられたんだよ」
一夏が小声で教えてくれた、それにしても部屋間違えるってどういうことだよ一夏。
「間違えただけじゃ殴られないだろ？」
「タイミング悪く箒がシャワーから出たときだったんだよ」
「そうなのかそれで箒が不機嫌なんだな」
これから箒に明日の一夏の特訓頼もうと思ってたのに最悪だ。でも仕方ないか。
「なあ箒、明日一夏の特訓一人で見てやってくれないか？やるのはいつもの剣道と勉強なんだけど」
「ふん・・・断る」
「頼むよ箒明日はどうしても無理なんだ」
「な・・・大和、明日無理なのか？」
「ああすまん。訓練機の許可が出るのが明後日になるみたいだから明後日からはＩＳ使った特訓だ」
そんな会話をしているうちに俺はカルボナーラを食べきっていた。
箒がダメなら他の人に頼むしかないよなぁ～。
「箒どうしても嫌なら他の人に頼むけど、どうしても嫌か？」
箒は１０秒ほど黙ってから口を開いた。
「大和の頼みだからな引き受けてやろう」
ちなみにこの１０秒ほどの間に箒は一夏が他の女子と２人きりになるのを恐れ一夏との２人の時間が無くなるなどネガティブな思考に

なり了承したのだった。
「サンキュー箒。じゃあ俺らは部屋に戻るから行くぞ一夏、今度は部屋間違えるなよ」
「おう。」
そして俺と一夏は部屋に戻った。
「それにしても一夏がいて助かったよ男1人じゃ辛いからな」
「そうだな俺も大和が居てくれて助かったよ」
そんな話をして俺たちは眠りについた。

翌日の昼休み

「楯無さん今日の勝負内容は組み手でいいですか？時間は放課後でお願いします。」
「う～んいいわよ」
「じゃあ放課後武道場で」

そして放課後

「よろしくお願いします。」
俺はＨＲ（ホームルーム）が終わってすぐに武道場に来たのだが楯無さんも同じ時間に来ていた。
「時間かかりそうなので3本勝負で、地面に体が付いたら一本で」
審判は生徒会の布仏虚（のほとけうつほ）先輩だった。ちなみにのほほんさんのお姉さんだ。
「始め」
虚先輩の凛とした声で試合が始まった。
いきなり俺は楯無先輩に突っ込んでいった。ＣＱＣ（クロスクウォーターズコンバット）（総合格闘術）には自身があるからである。俺はＣＱＣから柔道の一本背負いに切

り替えてすばやく楯無先輩を投げた。
「一本、大和君すごいですね」
「ありがとうございます次始めてください」
「わかりました、始め」
今度は楯無さんが古武術の奥義無拍子を使って攻めてきた、それを俺は篠ノ之流古武術奥義、零拍子でカウンターを取り楯無さんから1本を取った。
その後も俺が1本を取った。
「試合終了、勝者進藤大和」
「ありがとうございました。楯無さん約束どうりお願い聞いてもらいますよ」
「何かしら？」
「一夏は俺が守るんで一夏の事を俺に任せること。生徒会長は変わらない事ですかね今の所は他にもできたら連絡しますから。」
「わかったわところであなたは何者なの？」
「俺は日本の国家代表で自由国籍権持ってる情報を完璧に隠せる男のＩＳ操縦者ってとこです秘密ですよ」
俺の情報は世界単位で隠蔽されているんだから知らなくて当然なんだが聞かれれば素直に答えるのが俺のポリシーである。隠蔽しているのは一夏がＩＳを動かすまで世界で1人の男性ＩＳ操縦者だったからだ。
今は声明を出そうか迷っている。
「じゃあ私は今までどうりに動けばいいのね？」
「そういうことですじゃあまた」
俺は問題を1つ解決したんだがセシリアとの対決が待っていることを思い出しため息が出た。

ＥＰ５最強はどちらの手に（後書き）

どうだったでしょうか？

お気に入り登録してくださっている方が増えていくことが嬉しいです。

ＥＰ６（前書き）

更新が大変遅れてしまいすみません。

学校が再開して部活などもあって遅れてしまいました。

久々の投稿ですが一読お願いします。

EP6

「放課後第3アリーナに集合な一夏、今日からＩＳ使った訓練するからな」
「わかったでも俺ＩＳの事まだわかってないぞ」
「お前は頭じゃなくて体で理解するタイプだから大丈夫だ」
一夏は頭で理解するより体で覚えるほうが圧倒的に速い。

キーンコーンカーンコーン場所は変わって第3アリーナ
「今日からセシリア戦まで一夏には近接戦闘の訓練を俺と箒と3人で特訓してもらうぞ」
「なんで近距離で戦うんだよ？」
「銃使うのはいろいろ頭使わなきゃいけないからお前には無理だ、じゃあ早く打鉄（うちがね）に乗れ一夏、箒」
箒には学園に申請を出して借りた打鉄、一夏には俺の訓練用の打鉄を示していった。
「セシリアのデータを見たけどあっちは完全に遠距離タイプだ一夏とは相性最悪だ。そこで一夏には箒との訓練で接近戦、俺との訓練でセシリア戦を仮定した模擬戦をやるぞ。今日は箒と接近戦の練習をしろ一夏。」
ちなみに俺はリヴァイヴを展開している。セシリア戦もリヴァイヴでやるつもりだ。
そして3時間の訓練訓練を終えると千冬さんがアリーナにやってきた。
「織斑、お前のＩＳだが状況が状況なので専用機を学園側で用意する。だがいろいろな事情で遅れているそうだオルコットとの試合には間に合うから安心しろ」

いろいろな事情は十中八苦束さんがらみだろう。束さんが射撃武器を追加してくれてなければ白式は近接武器しかないからな～一夏は大変だろう。

そしてセシリアとの対戦の日

場所はロッカールーム俺と一夏は一夏の専用機（白式）がまだ届いていないことに焦っていた。白式が届かない場合は打鉄で戦うしかない。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！きました！織斑くんの専用ＩＳ！」

間に合ったか。焦ったのが馬鹿だったあの束さんが遅れるはずがない。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

「え？え？なんなの？」

「フォーマットとフィッティングが終わってないんだよ一夏」

ごごんっ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開いた。

そこにいるのはもちろん一夏の専用機白式だ。

「これが俺のＩＳ」

「はい！織斑くんの専用ＩＳ白式です！」

「一夏早く起動しろお前なら勝てるはずだ冷静に行けよ」

そうは言ったがフォーマットもフィッティングも終わってないからな。

「大和、箒、千冬姉大丈夫勝ってくるよ」

「一夏負けるんじゃねぇぞ。行って来い」
「ああ」
そして一夏はピットから飛び立っていった。

EP6（後書き）

次でセシリア戦を書きたいと思っています。

投稿がいつになるかはまだ未定ですが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1785s/

ＩＳ～インフィニット・ストラトス～黒の神と白き騎士

2011年10月8日20時22分発行